

## 初期の英語におけるゼロ代名詞

山 本 圭 子

### 0. Introduction

主語のゼロ代名詞を許す言語は (1a) のイタリア語のように動詞の AGR (Agreement) が豊富であるものと (2b) の中国語のように AGR を明示しないものとに分類されてきた。

- (1) a. e ha mangiato 'he/she has eaten'  
 b. e kanjian ta le 'he/she saw him/her'  
     see     him LE  
 c. e forforon him þone muðan foran on uter mere Chron A an.  
     897

'they blockaded the entrance from the open sea against them'

(1a) の 'ha' は 3 人称単数のみの語形であり、主語代名詞を復元することが可能である。現代英語の場合は AGR はあるが豊富ではないのでゼロ代名詞は許されないということが言える。(1b) の中国語の動詞には AGR は明示されない。kanjian は全ての人称・数に共通の語形である。AGR が現れないにもかかわらず主語ゼロ代名詞が許されるのは、Huang (1984) によれば、中国語は discourse-oriented の言語であり、その特色である zero topic を持ち、この topic に束縛される variable としてゼロ代名詞が現れるからである。一方、

---

※ 本稿は、日本英文学会第63回大会に於て口頭発表したものを修正したものである。司会者の加藤鉦三氏をはじめ大門正幸氏他の参加者の方々に貴重なコメントを頂いた。又発表原稿に対して、影山太郎氏、有村兼彬氏、加藤正治氏、鈴木憲夫氏から頂いたご指摘が極めて有益であった。ここに記して感謝を示したい。

古英語, 中英語の場合は人称語尾が存在するので, AGR は明示されていると考えられる (③の語形変化表参照)。しかし (1c) の例において *forforon* は複数人称に共通の語形である。初期の英語は現代ドイツ語よりさらに屈折が単純化しているのである。

生成文法においては項 (argument) の代名詞は初期の英語では義務的に現れ, 省略されることはないと考えられるため, 文献に確実に存在する, 項のゼロ代名詞に説明を与える試みはほとんどなかったと思われる。本論では Jaeggli & Safir (1989), Huang (1984) に従い, 古英語, 中英語のゼロ代名詞が主に variable であることを示し, その根拠をこの時代の英語が discourse-oriented であったという観察に求める。

## 1. Licensing and Identification

Jaeggli & Safir ではイタリア語と中国語の2つのタイプの言語を統一的に扱い, ゼロ主語を license する条件として(2)を提案している。

- (2) Null subjects are permitted in all and only languages with morphologically uniform inflectional paradigms.

Morphological Uniformity: An inflectional paradigm P in a language L is morphologically uniform iff P has either only underived inflectional forms or only derived inflectional forms.

(Jaeggli and Safir 1989)

この条件によれば, ③のように現代英語は一部が派生形であるため uniform ではなく, フランス語も音形では uniform でないためゼロ主語は license されない。それに対し, ドイツ語, イタリア語, 古英語, 中英語はすべてが派生形であるため license されることになる。

- |               |          |            |                  |           |
|---------------|----------|------------|------------------|-----------|
| (3) English : | French : | German :   | Middle English : | Italian : |
| talk          | /parl/   | arbeit-e   | her-e            | am-o      |
| talk-s        | /parl-ø/ | arbeit-est | her-(e)st        | am-i      |

/parl-e/	arbeit-et	her-(e)þ	am-a
	arbeit-en	her-eþ	am-iamo
	arbeit-et	her-eþ	am-iate
	arbeit-en	her-eþ	am-ano

しかし実際にはドイツ語では項のゼロ主語は許されないという事実を説明するために、さらに identification の条件を提案している。

- (4) i. AGR-TENSE can identify an empty category as thematic pro iff (rich) AGR-TENSE governs the empty category.
- ii. Local AGR can identify an empty category iff it inherits features from a C-commanding NP.
- iii. An empty category can be identified if it is bound by a zero topic. (Huang 1984)

(4i) が意味するのは、thematic なゼロ代名詞が identify されるためには AGR-TENSE が同一節点になければならない、ということである。ところがドイツ語は Verb Second 現象を示すので ((7)参照) TENSE は COMP の位置に、AGR は INFL の位置にあると仮定することができる。よって TENSE と AGR が別節点上にあるため統率によってゼロ代名詞を identify することができない、と分析される。一方 AGR が明示されない中国語の場合は Huang (1984) の分析を受け入れて (4ii), (4iii) が提案されている。(4ii) によって示されるのは、例えば主節主語と従節主語が同一指示であり、従節主語がゼロであるとき、従節の AGR は主節主語から素性を受け継ぐ、という場合である。この場合ゼロ代名詞は pro として identify される。(4iii) によればゼロ topic が存在すれば、これに束縛される variable としてゼロ代名詞が identify される。

## 2. Old and Middle English

### 2. 1. Null Subjects

前節の Jaeggli & Safir の分析を受け入れると古英語、中英語は動詞の語形変化が形態的に uniform であるためゼロ代名詞が license されると考えられる。では identification はどのように行われのでしょうか。(5)は非項 (Non Argument) である主語が現れない例であり、(6)は項である主語が現れない例である。

- (5) a. and be ðam e is þus gecwæden ‘and it is said of it as follows’

ÆLS 24.232

- b. e Nis seo orþung þe we ut blawaþ and in ateoð oþþe ure sawul ac is seo lyft þe ealle lichamlice þing on lybbað ‘It is not our breath or soul that we blow out and draw in, but air, in which all bodily things live’

ÆLS 22.214

(5a) では、‘it is said’ の ‘it’ に当る主語が表されていない。(5b) においても ‘Nis seo orþung’ の主語 ‘hit’ が表されていない。しかし非項については identification は必要ないと考えられるので、license 条件が心要十分条件であるとする。

- (6) a. þæt ic gum-cystum godne funde beaga bryttan breac ponne e moste

‘that I found a very good ring-giver, enjoyed him while I might’

Beo 1487

- b. þa Neroni þæt gehyrde, þa smercode he<sub>i</sub> & cwæþ,... Petrus<sub>j</sub> cwæþ,... Locode þa up wið Simones<sub>k</sub> & cwæþ,... & hie þa sona hine<sub>k</sub> forletan, & he<sub>k</sub> gefol on þone stocc be þære stænenan stræte.... ða genaman men eft þone stoc on weg,... þa e<sub>i</sub> heht Petrus & Paulus on bendum healdon,... ‘When Nero heard that, he smiled, and said,... Peter said,... He then looked up towards Simon and said,... And immediately they left him, and he fell upon the scaffolding by the paved street.... Then afterwards men took the scaffolding away,... Then Nero com-

manded Peter and Paul to be kept in fetters,...' BIHom 189.  
4-17

- c. ðis gear heald se kyng Heanri; his hird.... And þær he; let  
sweren ercebishops... and ealle þa ðeines ða þær wæron his  
dohter Æðelic Engla land and Normandi to hande æfter his  
dæi.... And sende hir siððen to Normandi. And mid hire  
ferde hire brōðer Rotbert eorl of Gleucestre. and Brian þes  
eorles sunu Alein Fergan. And e; leot hire beweddan þes eorles  
sunu of Angeow.... Chron an 1127

'This year king Henry held his court .... And there he obtained  
an oath from archbishops.... and all those thanes present, that  
England Normandy should pass after his death into the possession  
of his daughter Æthelic... then sent her to Normandy, and with  
her went her brother Robert, earl of Gloucester and Brian, son  
of count Alan Fergant. And he married her to the son of the  
count of Anjou....

- d. fil me; a cuppe of ful god ale, And e; wile drinken er y spelle  
Havelok 15-Mustanoja

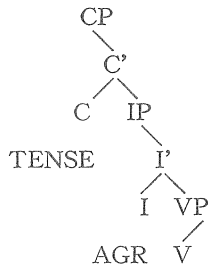
- e. he; cwæþ þæt an sunnandæg of deaþe e; arise HomU 35.222.  
24-Mitchell 'he said that one Sunday from death he shall arise'

項は identification が必要である。(6a)においてはゼロ主語-moste という  
線的順序になっていると考えられるが, moste は1人称3人称単数が同形であ  
って, イタリア語のように AGR だけでゼロ主語を identify することはでき  
ない。上位節の ic とゼロ主語が同一指示であることが示される必要がある。  
(6b) では4行目のゼロ代名詞は1行目の Neron と同一指示である。この場  
合もゼロ主語の動詞 heht は1人称3人称単数に共通の語形であり AGR だけ  
でゼロ主語を identify できないが, さらに問題となるのは13行に渡る文脈の間,  
他の3人称代名詞が現れていることである。ゼロ代名詞は2行目の Simones,

またはこれと同一指示の3行目の *he* と同一指示になる可能性があるわけであるが、文脈により、この解釈は排除される。*Neron* は1行目にしか現れていないが、このネロの存在は一種の「場」を提示し、文脈中意識され続けていると考えられる。(6c) では6行目のゼロ主語は1行目の *Heanri* と同一指示であるが、他の3人称代名詞 *Rotbert*, *Brian* が文脈の途中に存在しているので(6b)と同様に問題である。(6d) ではゼロ主語は先行する節の *me* と同一指示であるが *wile* は1人称3人称単数に共通の語形である。(6e) では主節の *he* と従節のゼロ主語が同一指示になっている。

以上の点から問題点を整理すると、古英語、中英語はドイツ語と同様にゼロ主語が *uniformity* により *license* される。しかし *identification* に関しては、ドイツ語が現在形の語形変化のうち4つから5つが異なるのに対し古英語、中英語は3つから4つが異なり、後期になるとさらに単純化されるので、ドイツ語と比較しても *AGR* が豊富であるとは言えない。*Agreement* だけでは解釈が困難である例があることは、(1c) や(6)で見た通りである。古英語、中英語はドイツ語のように *Verb Second* 現象を示すため、その *trigger* としてドイツ語同様(7)のように *TENSE* が *COMP* のもとに存在すると仮定する。

(7)



そうすると *AGR-TENSE* の統率による *identification* は不可能になる。従ってこの2つの理由—豊富でない *AGR*, 別節点にある *AGR* と *TENSE*—により(4i)による *identification* は不可能であり、(4ii)又は(4iii)によることになる。

OE・ME	German	Irish
NS(Null Subject)	non-NS	NS
V2	V2	non-V2
'less rich' AGR		

(6e) は (4ii) によって identify できると考えられる。主節主語から従節の AGR が素性を受け継ぐことができるからである。しかしほとんどの例はこのような C コマンドする NP を持たず, AGR が素性を受け継ぐことができないため, (4iii) によって identify せざるをえない。従って(8)の構造を古英語, 中英語に対して仮定する。

(8)  $[_{CP(TOPIC)} \phi_i [_{C'} [[_{IP} \dots e_i \dots]]]]$

CP の指定部の位置にゼロ topic が存在し, この topic に束縛される variable としてゼロ主語が identify される。例えば (6b) では4行目の 'ða e heht' で始まる節の CP の指定部にゼロ topic が存在し, さらに先行する全ての節(第1節を除く)にゼロ topic が存在して Huang の言う topic chain を形成している。そのそれぞれのゼロ topic が最初に明示された topic である Neron によって束縛されると考える。以上により, 初期英語のゼロ主語の大部分はゼロ topic に束縛される variable であることを示した。

## 2. 2. Null Objects

目的語のゼロ代名詞については, Rizzi は arbitrary なものだけに, Huang は referential ものだけに言及しているが, 古英語, 中英語にはいずれも存在している。(9)の a から d は referential な目的語が現れていない例, e と f は arbitrary は目的語が現れていない例である。

- (9)a. certes, were it gold, or in a poke nobles alle untold, Thou  
 shouldest have e, as I am trewe smyth  
 'if you asked for gold, a bag of sovereigns or of wealth untold, it  
 shall be yours' Ch. CT A Mil. 3781

- b. Life<sub>i</sub> from Sansfoy thou tookst; Sansloy shall e<sub>i</sub> from thee take.

Spenser, F. Q. I. 36-Visser

- c. The tyme of birthe come, if it be a maal, sleeth hym; if a femaal,  
kepith e.

Wyclif, Ex. I. 16 -Visser

- d. That man<sub>i</sub> of hers, Pisanio, her old servant, I have not seene  
these two dayes.

Go, look after e<sub>i</sub>.

Cymb. III. v. 55

- e. the kyng herd e tell of þis tythand

OT Paraphrase 6075

- f. he made e to sarche hym and to stoppe his bledynge woundes

Malory MD 351-Mustanoja

Cf. Un generale può constringere e a [PRO mangiare con lui]

'A general can force e to obey his orders'

(Rizzi 1986)

(9a) の 'Thou shouldest have e' の 'e' は 'it' であると考えられ、先行する仮定節内の 'it' と同一指示である。(9b) のゼロ目的語は先行する節に現れる 'Life' であり、(9c) の最後の節は 'if a femaal, kepith her' であると解釈できる。(9d) は対話であるが、ゼロ目的語は him であって、man と同一指示である。(9ef) は people, man など arbitrary な目的語が現れていないと考えられる。Rizzi のイタリア語の例に対応するものである。

ここで目的語のゼロ代名詞の licensing にも uniformity の条件を拡張する。すなわち格も一種の Agreement であると考え、全ての格形が派生形であるか又は全てが非派生形であるならば形態的に uniform であり、ゼロ目的語を license すると仮定する。古英語、中英語は 'talū' (tale) の変化によって示されるように全て派生形であって uniform であり、ゼロ目的語を license する条件を満たすと考える。

sg. n. seo tal-u

a. þa tal-e

g. þære tal-e

d. i. þære tal-e



identification については referential な目的語には主語の場合と同様にゼロ topic を仮定する。arbitrary な目的語は、make, let, hear など語彙的に限られた動詞と共に現れることから、Rizzi の Assign arb (arbitrary な解釈を付与せよ) 規則を条件とする。以上の主語及び目的語のゼロ代名詞が現れる条件を(10)にまとめる。

(10)

License Identification	Subject		Object	
	Non Argument	Argument	Arbitrary	Referential
	uniformity			
	$\phi$	zero Topic	Assign arb	zero Topic

(arb=arbitrary interpretation)

license 条件は全て uniformity によるものとする。identification は主語、目的語共、指示的なものはゼロ topic による束縛によるものとする。非項の主語は identification の必要はなく、arbitrary な目的語は Assign arb 規則による。

現代英語ではこの全てのゼロ代名詞が失われている。主語については uniformity 及びゼロ topic が消失し、目的語についてはゼロ topic が失われ、さらに Assign arb 規則が作用しなくなったからであると考ええる。尚、‘he ate e’ のような例については lexicon で Assign arb を適用する Rizzi の分析に従う。

### 3. Early English as a Discourse-Oriented Language

以上の点からゼロ topic の存在と消失がゼロ代名詞に大きな係わりを持つことを仮定したが、Huang によればゼロ topic は談話指向言語 (discourse-oriented language) の特色であり、従って初期英語が談話指向であることを示す必要がある。高橋 (1986) によっていくつかの証拠があげられているがさらに次の事実を示すことができるだろう。

## 3. 1. Topic Prominence

Huang によれば、談話指向の一つの特色として topic-prominence が挙げられる。これは文指向言語 (sentence-oriented language) の特色である subject-prominence に対するものである。

- (11) a. *ðas fif wittes<sub>i</sub>, hie<sub>i</sub> tacniþ ða fif gildenese besantes*

'These five senses betoken the five golden Bezants'

Vices & V. 17

- b. *Se biscop & se mæsse preost<sub>i</sub> gif hi<sub>i</sub> mid rihte willaþ Gode þeowian, þonne sceolan hi<sub>i</sub> þegnian dæghwamlice Godes folce*

'If the bishop and the priest will rightly serve God, they must minister daily to God's people'

BlHom 45. 29

- c. *þe lordys sone<sub>i</sub>, whanne he<sub>i</sub> had made þis cursed lettere, he<sub>i</sub> bare it to þe emperoures paleys*

Jacob's Well 278. 15 -Visser

- d. *For hwon ne magon we geþencan þæt seo eorþe is Godes?*

& Godes is þæt yrfe þe we big leofiaþ

'Why can we not consider that the earth is God's? And the substance by which we live is God's'

BlHom 51. 18

(11)のaからcはいずれも、文内では余剰的に見える名詞と代名詞が現れている。(11a)の *ðas fif wittes* 'these five senses' は *hie* 'they' と同一物を指示する。(11b)の *hi* 'they' はいずれも文頭の *Se biscop & se mæsse preost* を指示する。(11c)も同様の構造である。これらの例は古英語、中英語には頻繁に見られるが文頭の名詞が topic の位置に入っており、続く代名詞は IPspec の位置にあると考えれば説明できる。(11d)は一旦 topic として明示されたものを文頭に持ってくる傾向を示した例であり、*Godes* 'God's' が先行する節で topic として確立され、次の節でこれが文頭に現れている。

## 3. 2. Discourse Anaphor

談話指向言語のもう一つの特徴として Huang は discourse anaphor を挙げている。(12 a) は朝鮮語の例であり discourse 内で束縛される anaphor が示されている。Speaker B の caki-ka は 'self' に当り、これが文を越えて談話内で束縛されている。英語では 'himself came' は非文になるのに対し、(12 a) は文内では 'self' が単独で現れているのである。

(12 a. Speaker A : John-i salam-il ponae-əss-ni?

John-NOM man-ACC send-PAST-Q

'Did John send the man?

Speaker B : ani, caki-ka cikcəp o-əss-ta.

no self-NOM in-person come-PAST-DECL

'No, he himself came in person' (Huang)

b. Abraham fremede swa him se eca bebead,

...

...

...

and þa seolf onfeng

Gen A 2370 -Mitchell

torhtum tacne

'Abraham did as the Eternal bade him... and then (he) himself received circumcision'

一方 (12 b) の古英語の例では 3 行目の seolf 'self' は 1 行目の Abraham に束縛されており、主格で現れている。「アブラハムは神が命じた通りに行い、自分が割礼を受けた」という意味である。

### 3. 3. As For X

Johannesson (1986) によればゼロ代名詞全体は徐々に減少していたにもかかわらず, as for によって導入される Marked Topic Construction において現れるゼロ代名詞は15世紀に増加している。(13 a) はゼロ主語の例, (13 b) は目的語の例である。

(13 a. as for Wylliam Daltoni, eȳ ys yett yn Hollond

William Cely 1487 ; Hanham 1975 : 226

-Johannesson

b. as for pardon<sub>i</sub>, I can never get e<sub>i</sub>, withowght I schold paye to  
myche money for it      Paston Lett (Gairdner) III, 11-Visser  
OED によれば as for, as to の確証例は14世紀以降であるから、この時期にまだ談話指向の傾向が保持されていたとすると、as for 句が topic を明示することにより恐らく as for X 全体に束縛されるゼロ代名詞が可能であったのだと考えられる。

[<sub>TOPIC</sub> as for X<sub>i</sub> [e<sub>i</sub> is... ]]

以上により、初期の英語には談話指向の傾向があり、その特色を備えていることを示した。これらは、英語が文指向となることによって失われる。

#### 4. Conclusion

OE において既に AGR は弱く、また Verb Second 現象のため、pro を local に identify することはできないが、初期の英語には談話指向の傾向があり、その特色としてゼロ topic が存在し、この topic に束縛される variable としてゼロ代名詞が identify されることを示した。

#### 参考文献

- Huang, C.-T. J. (1984) "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *LI* 15, 531-574.
- Jaeggli, O. and K. Safir. (1989) "The Null Subject Parameter and Parametric Theory," in O. Jaeggli and K. Safir eds., *The Null Subject Parameter*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Johannesson, N. (1986) "Variable Subject Deletion in Late Middle English Topic Constructions," in S. Jacobson ed. *Papers from the third Scandinavian Symposium on Syntactic Variation*, Almqvist & Wiksell International, Stockholm.
- Kemenade, Ans van. (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.

- Li, C. and S. Thompson. (1976) "Subject and Topic: A New Typology of Language," in C. Li ed., *Subject and Topic*. Academic Press, New York.
- Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*, Clarendon Press, Oxford.
- Mustanoja, T.F. (1960) *A Middle English Syntax*, Société Néophilologique, Helsinki.
- Ohkado Masayuki. (1991) "English as a Pro-Drop Language," 『英文学会誌』第36号 大阪教育大学英語英文学教室
- Rizzi, L. (1986) "Null Objects in Italian and the Theroy of pro," *LI* 17, 501-557.
- 高橋 潔. (1986) 「Li and Thompson (1976) の類型論的観点から見た OE と ModE の比較」『英語考論考』The English Linguistic Society, 仙台。
- Visser, F. Th. (1963) *An Historical Syntax of the English Language*, part I, E. J. Brill, Leiden.
- Weerman, F. (1989) *The V2 Conspiracy*, Foris, Dordrecht.